

私とキノコとの出会い

松崎 聖子

千葉県の内房で育った私はそれまでキノコとは無縁の生活を送っていました。今から24年前、栃木県人の主人と結婚したその年からキノコスケジュールが毎年やってくるようになりました。

私にとっての天然キノコ第一号はチチタケ(栃木県ではチタケといいます)でした。ピロードのような見た目の美しさ、深い印象的な赤茶色、絵に書いたようなそのものズバリのキノコの形、かわいらしい手ごろな大きさ、独特の香りと味、すべて新鮮でしたが、すんなりと受け入れることができました。でも、真夏にキノコ狩りとはまったく意外でした。当初は「汗だくでキノコ狩りするんだ??」と思いました。

当時、既に60歳を過ぎていた義母が、周りの体力の落ちたキノコの諸先輩方からいろいろな場所を聞き出したとあって、あっちに行ってみよう、こっちに行ってみようと、栃木や福島の間を中心にして体育会系並に楽しんできました。

松崎家のキノコに対する期待は「食」です。しかし、そこに至るまでには多くの課題があります。まず、食毒の判定。採集から処理までの時間、虫だし等のキノコの処理方法、そして保存法です。

さらに、調理法も課題の一つです。我が家では調理方法がどうしてもワンパターンになってしまいます。キノコの本やインターネットなどで情報を入手していろいろな料理に挑戦しています。でも作る料理はなぜかいつも同じようなものになってしまいます。まだま



ハナビラタケをゲットした時の私、息子、娘と義母(写真撮影は夫)

だ勉強が足りません。

千葉菌類談話会に入会したのですが、所詮「食」しか頭になかった我が家の面々は、さすがに学術面、記録写真の面で他の会員の方々についていけず、気後れしてしまいますが、観察会、スライド大会などスケジュールが許す限り参加させていただきたいと思いません。

上の写真は義母がバリバリ元気だった頃のもので、カメラマンは主人です。下の子をおぶって、私が一番不利な条件でハナビラタケをゲットした時の思い出の写真です。

現在、娘は社会人、息子は今年受験生になります。当時、おぶわれていた息子は今や私と同じ目線でキノコ探しをしています。写真のキノコも「背中から俺が見つけた。」などと言っています。これからも家族そろってキノコ狩りを楽しんでいきたいと思っています。